

預かり保育の在り方についての一考察 (4)

— コーナー保育の方法的特性を生かした「実施プログラム」の作成 —

恒 岡 宗 司・中 田 章 子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

A Study of the Children's Care after the Hours (4) :Development of a Child Care Program Using the Play Corner Method

Munechika Tsuneoka・Noriko Nakata

Naragakuen University Narabunka Women's College

預かり保育は、幼稚園における大切な子育て支援の一つとして位置付けることができる。そのため預かり保育の量的拡充が推進されるとともに、質的向上も求められている。筆者らは、これまでコーナー保育の保育方法・保育形態を預かり保育の場を導入することがより有効な質的向上につながるのではないかと考え、継続研究として取り組んできた。さらに預かり保育の質的向上を目指し改善していくためには、預かり保育の可視化を図り、教育活動の計画を確かなものにしていくことが必要であると考えた。

本稿では、コーナー保育の方法的特性を生かした指導計画「預かり保育実施プログラム」（以下、「実施プログラム」と表す。）を作成し、研究協力幼稚園での試行を通してその有用性を考察した。

キーワード：コーナー保育、預かり保育実施プログラム

1. 問題と目的

筆者らは、これまで預かり保育（本稿では「教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動」を指す。）の在り方について、本学紀要第44号で幼稚園教育史の視点から、さらには同紀要第45号で幼稚園教育要領に示された留意事項及びコーナー保育の方法的特性を生かした保育方法・保育形態（以下、「コーナー保育の手法」と表す。）の視点から、継続研究として考察してきた。本稿では、幼稚園の特性を生かした預かり保育の在り方について、コーナー保育の手法を生かした実施プログラムをモデルとして提案する。なお、預かり保育の内容に適した様式として作成することから、通常の保育で作成される長期・短期の指導計画との混同を避けるために、預かり保育の指導計画は「実施プログラム」の名称を用いることとした。

プログラムの作成に当たっては、計画性の観点からは月案レベルを、記録性の観点からは週案レベルを

想定した。具体的にどのような様式が適切であるかについて、次の(1)～(4)の作成条件を仮説として考えた。

- (1) 計画段階における保育意図や環境構成、そして幼児の遊びに対する興味・関心についての可視化が図れていること。
- (2) コーナー保育の手法が様式として適切に示されていること。
- (3) 預かり保育における記録性を高め、評価機能をもたせていること。
- (4) 実施プログラムを通した学級担任と預かり保育担当との引継機能をもたせていること。

2. 実施プログラム作成の考え方

2.1 先行研究による預かり保育についての基本認識

預かり保育に関する筆者らのこれまでの研究を踏まえ、次の5点を今回の実施プログラム作成に当たっての基本的な認識とした。

- (1) 幼児が幼稚園で過ごす1日の中で、相互の人間関係の変化を踏まえること。
- (2) 所属学級の保育室とは異なる場所で、また異年齢集団の中で過ごすことによる幼児の心理的变化に留意すること。
- (3) 幼児が安心して居場所を見だし、主体的かつ自由に時間を過ごせる遊び環境をつくり出す必要があること。
- (4) コーナー保育の手法を取り入れることが、幼稚園の特性を生かすことにつながること。
- (5) コーナー保育の手法には、幼児の養護面に対する配慮が含まれていること。

以上の(1)～(5)のうち、研究テーマとの関係から特に(4)、(5)の具現化を目指した実施プログラムの作成に取り組むことにした。その際、幼稚園教育要領解説の一般的な留意事項「4 長期の指導計画と短期の指導計画」で述べられている「特に幼児の生活のリズムについては、1日の生活の中にも、ゆったりとした時間を過ごしたり、心身が活動的で充実感が得られる時間を過ごしたりして、めりはりのある生活を営むことができるようにすることが大切である。」¹⁾ ことについて、実施プログラムにどのように反映させて可視化が図れるかが重要であると考えた。

預かり保育においてコーナー保育の手法を取り入れることの有用性については、昭和23年に公表された保育要領にも関連する記述として幼児の生活指導に関する「4. 社会的発達について」の項でみられる。同要領は、「まえがき」にみられるように戦後の混乱期・復興期にあった我が国において、保育者だけでなく母親に対する育児の貴重な参考書にもなってほしいという願いと意図が込められたものであった。当時と現代とでは、時代も社会的背景も幼児教育に対する考え方や情報量等も大きく異なっているが、ここに引用する。

「6. できる限り子供が自分で選択をするようにさせよう。遊びでも、生活でも、すべてでき得る限り、子供が先に立って自分で選択をするようにさせたい。自分で選んだことは、その結果がよくても悪くても、すべて自分の責任である。自分で選ぶことはこの意味で、最も自立的な生活態度の一つの要素である。」

まず自ら選ぶこと、そしてその結果を自分で切実に体験すること、この自主的生活態度を身につけさせるために、あらゆる可能な機会に自分で選択するようにさせよう。」²⁾

筆者らは、同要領の記述を根拠にして預かり保育としての教育活動は、そのすべてをコーナー保育の手法によることが望ましいと主張するものではない。むしろ形式的・画一的なとらえ方を避け、各園の実情に即した柔軟性に富んだ保育方法・保育形態によって展開されるべきであると考えている。

2.2 実施プログラムについての基本的な考え方

(1) 通常の保育における長期・短期の指導計画との関係付けについて

幼稚園生活を継続性と計画性のあるものにしていくためには、教育課程の編成及び指導計画の作成は不可欠なものである。長期の指導計画は、教師一人一人が確かな見通しをもって幼児の指導に当たることができ、また短期の指導計画は、幼児の実態に即しながら必要に応じて弾力的に運用されることが重要である。こうした考え方は、預かり保育においても共有していく必要があり、実施プログラム作成に当たっては幼稚園として作成された長期・短期の指導計画を準用し保育の連続性を図っていくことが望ましい。しかし、預かり保育では、その日の利用児が前日と異なること、担当者が代わることなど、人的環境が大きく異なることが日常的にみられる。そのため事前に立てた計画に拘泥することなく、当日にその場での柔軟な対応をしていくことも必要である。こうした対応の変更を保育記録として残すことは、園全体で預かり保育における幼児の様子を可視化させ、情報を共有していく機能が働くものとする。

(2) 記録機能を兼ね備えた実施プログラムの様式について

実施プログラムに基づく預かり保育を園全体で取り組んでいくためには、一定の様式を決めることが重要である。実施プログラムは、計画性だけでなく記録性の要素も組み込んだ様式にすることによって、保育の連続性を図ることができるものとなる。

また、計画機能・記録機能のほかに継続性と簡便性、利便性と有用性の視点からも検討していく必要がある。具体的な検討課題としては、次の3点が挙げられる。

- ① 幼児の遊びの様子については、どのようなことがらを引継事項として記録に残すことが適切か。
- ② 1日単位ではなく週単位でみていくことが、預かり保育のPDCAサイクルとして必要ではないか。
- ③ 教師に過度の負担感を生じさせないようにするためには、どのような記述内容が適切か。

とりわけ預かり保育担当者の勤務時間が限られている状況下で、実施プログラムの作成と日々の記録に細密さを追求しすぎて時間を費やさなければならないことは現実的でない。特に記録については、通常の保育での教育活動との連続性の観点から幼児がどのコーナーを選択したかなどを中心に、その日の遊びの様子やコーナーの設定変更の事実と理由をメモに残す程度にとどめたい。また、幼児同士の人間関係や特に配慮を必要とする幼児の様子、保護者からの意見・要望等については、記録以外に学級担任に直接口頭で伝えることも連携を密にしていく上で大切である。

(3) 保育の可視化が図れるコーナー設定について

実施プログラム作成に当たっては、利用人数、実施日数、時間、担当する人的体制、保育室の整備、時期の問題など、多くの変動要因に留意する必要がある。さらには幼児一人一人の生活スタイルや生活リズムへの対応をはじめ幼児同士の人間関係についても、保育状況と保育記録の共有化に努めながら学

級担任と預かり保育担当者との連携を十分に図っていかなければならない。そのためにはどのような方法で情報交換を行い、実施プログラムにどのように書き表し伝えていくか、様式を考える際に併せて検討していく必要がある。すなわち預かり保育の質的向上を図っていくためには、検討の方向性として保育の可視化に近づける方途を探らなければならない。そのための有効な方法の一つとして、コーナー保育の手法を取り入れて実施プログラムの様式に反映させていくことが考えられる。

2.3 コーナー保育実践園の事例研究

愛知県豊田市にある豊田花園幼稚園では、通常の保育においてコーナー保育を園全体で取り組まれた実践がある。平成25年に訪問した際にいただいた当時の月案³⁾を見ると、裏面にはコーナー設定のレイアウト（図1）が手書きされていた。裏面や別紙には準備物やその留意点、援助の意図、途中からのコーナー変更などがメモ形式で書き込まれ、記録性の高い内容であることがうかがえた。月案は預かり保育用の指導計画として作成されたものではなかったが、コーナー保育の手法を取り入れた実施プログラムを作成する上で多くのヒントを得ることができた。

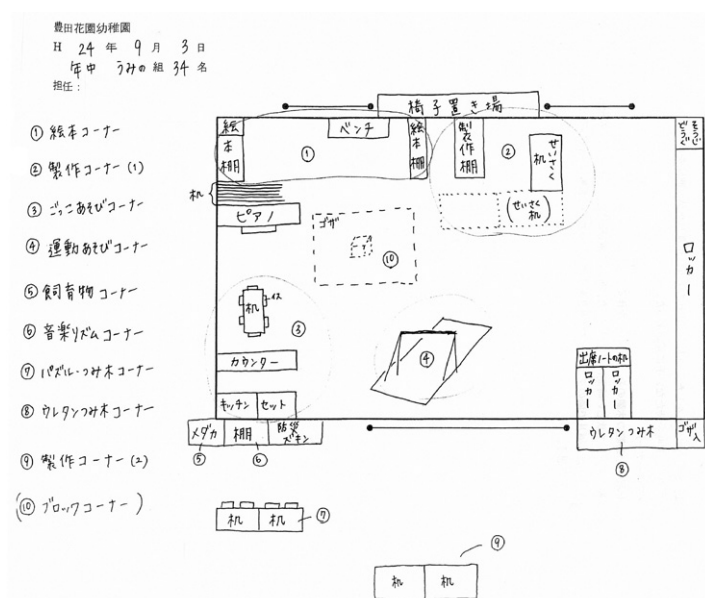


図1 「コーナー設定のレイアウト例」（許可を得て転載）

4歳児組の本事例は、9月3日から設置されたコーナーであり、①絵本コーナー、②製作コーナー(1)、③ごっこあそびコーナー、④運動あそびコーナー、⑤飼育物コーナー、⑥音楽リズムコーナー、⑦パズル・つみ木コーナー、⑧ウレタンつみ木コーナー、⑨製作コーナー(2)、⑩ブロックコーナーと、コーナー名が手書きされていた。

当園ではコーナーでの遊びの様子の記録方法については、コーナー配置図に書き加えたり別紙にメモとして記録したりするなど、個々の教師にまかされていた。本事例の学級担任は別紙に手書きで記録していた。次に紹介する文は、絵本コーナー、製作コーナー(1)、ごっこあそびコーナーでの幼児の様子や教師の考えなどについて書かれていた内容の一部であり、パソコンで入力し直したものである。

[絵本コーナー]

◎絵本の棚を1つ増やし、さらに絵本の数を増やした。週末の絵本の貸し出しも、絵本コーナーから借りていくことにしたため、代本板も一緒に置いておいた。昔話や自然の本は必ず取り入れていく。

●給食の後のお腹の休憩や朝の時間に、落ち着いて読む子や友だち同士で座って読む子が増えた。“ここが読む場所”と分かる椅子が置いてあることで、落ち着いて読むことができているのではないか。

[製作コーナー(1)]

◎同じ環境で様子を見ていきたいため、継続。

●相変わらず、製作コーナーは大人気。じっくり取り組んで欲しいので、朝の時間や短い時間は休止し、長く遊ぶことのできる時間のみ開いている。材料の中でも、箱と牛乳パックの消費が早いのが、1日の量を決め、なくなってもそれ以上は出さない。が、それで良いのか。

[ごっこあそびコーナー]

◎マナー化しており、遊ぶ子も決まってきたので、“お店屋さん”ごっこに変更。商品も子どもと作り、子どもの声を拾って必要なものを増やしたり、子どもの様子を見ながら店をかえたりしていく予定。

●第1弾は、ドーナツ屋さん。自分たちで作ったドーナツで、お店屋さんが始まった。新聞で作った帽子や、お花紙のジュースも用意した。ねらい通り、今までごっこあそびコーナーに興味を持っていなかった子も参加し始め、特に男の子の参加が多いことに驚いた。まだ、お金が必要という声が出ないので、お金は登場していない。時間が経つと、ジュースを鍋で煮たり、ドーナツ屋さんと猫ごっこが合体し、猫のえさになったりしていたが、いつもコーナーには子どもがたくさん集まっていた。

これらの記録は、月案の裏面に1か月の保育報告としてまとめられたものではなく、その都度の記録として日々書き加えられたものである。学級担任の記述を読むと、幼児の遊びの姿からコーナー設置の意図や準備について◎印で書かれている一方、援助の仕方がこれでよいのか、コーナーでの遊びを継続していくかどうかなど、学級担任としての迷いと疑問、幼児の遊びの様子への驚きや願い、環境構成や援助についての見通しと判断を●印で記録されていることがわかる。

コーナー保育の手法を導入した預かり保育においても、当園の記録機能を盛り込んだ実践例を参考に、実施プログラムを作成していくこととした。

2.4 研究協力幼稚園の概要

コーナー保育の手法を取り入れた実施プログラム作成に当たっては、一つの幼稚園をモデルとして指導方針や目標・ねらい、個々の幼児の養護面への配慮等を反映させていくことが必要と考えた。そのため奈良市立認定こども園富雄南幼稚園（以下、「富雄南幼」と表す。）に共同研究を依頼し、先生方からも快諾を得ることができた。当園についての概要は次のとおりである。

奈良市立認定こども園富雄南幼稚園は、昭和26年に生駒郡富雄南村立富雄南幼稚園として創立されて以来、昭和30年には奈良市立富雄南幼稚園と改称され、平成21年には奈良県初の認定こども園とし

て認可を受けた。奈良市立認定こども園富雄南幼稚園として地域の幼児教育のセンター的役割と子育て支援の機能を果たす中、平成27年度には「子ども・子育て支援新制度」のスタートに伴って奈良市立富雄南こども園となる。平成26年度は3～5歳児164名が在園し、各学年2学級、計6学級で編制された。預かり保育については平成21年度から実施され、平成26年度の長時間利用児の登録数は32名であった。毎日の平均的な利用児は25名程度で、専任担当者が4名配置されていた。

3. 富雄南幼の実施プログラム作成の実際

3.1 基本モデル様式による実践

富雄南幼の先生方には、実施プログラム作成に取り組むための配慮事項として次の4点を示し、試行を重ねながら修正・改善に取り組んでもらった。

- ・ 自園の指導方針や目標・ねらいとの関係性・継続性を図ること。そのためには、従前から作成している長期・短期の指導計画の記述内容をなるべく反映させていく。
- ・ 指導計画又は指導記録については、特に預かり保育担当と学級担任との連携を図るための引継機能を重視するとともに、双方に負担過重にならないように簡潔性・利便性を重視した実施プログラムの様式を考える。
- ・ 幼児の幼稚園での生活全体を見通しながら、異年齢による集団構成の中で開かれた人間関係を築いていけるように配慮する。
- ・ 預かり保育を利用する幼児にとって保育室の移動や異年齢の集団など、物的・人的環境の変化から生じる不安感や緊張感をなくしていけるように家庭的な雰囲気づくりに努め、コーナーの一つにはなるべく自分の居場所を感じ安心してくつろげるような場を設定する。

富雄南幼では既に長時間保育の指導計画が月案⁴⁾として作成されていた。(付図1)しかし、本研究でのコーナー保育の手法を取り入れた預かり保育を試行実践してもらうため、指導計画の内容を準用しながら、筆者らが例示した基本モデルの様式を使った月案作成と週の記録に取り組んでもらった。(図2)

なお、月案の作成及び週の記録は手書きで行われていたが、本稿では記入者の了解を得た上でパソコン入力したものを示す。

預かり保育実施プログラム		10月	園長印	学級担任印	担当者印
ねらい	[3歳児] ・したいことや思っていることを友だちや保育者に話しながら、自分の好きな遊びを楽しむ。 ・季節の変わり目なので一人一人の体調に留意する。				
	[4歳児] ・保育者や異年齢の友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにする。				
	[5歳児] ・年下の友だちと遊んだり世話をしたりする中で親しみをもち、思いやりの気持ちをもってかかわる。				
【今月のねらいについての設定理由】 (3歳児) 異年齢の友だちの遊びに刺激を受けて真似をしたり誘われて一緒に遊んだりする姿がみられるので、その中で自分の思いを伝えて遊んでほしい。 (4歳児) 友だちを誘い合って好きな遊びを楽しんでいる幼児もいれば自分のやりたい遊びを見つけてじっくり楽しんでいる幼児もいるので、異年齢児ともかかわって遊んでほしい。 (5歳児) 年下の友だちに優しく声をかけたりする姿がみられるので、年長児の自覚をもち親しみをもちかかわってほしい。					
【コーナーでの遊び】 休息コーナーではゴザの上にカーペットを敷き、好きな時に休息できるように設置し、周りにはパーティション（牛乳パックで作ったもの）で仕切っている。絵本コーナーでは座卓を置いて周りにはパーティションを置いて仕切りをして落ちついて読めるような環境をつくっている。製作コーナーの近くには製作材料を置いて自由に作れるようにしている。保育室の真ん中にはゴザを敷き小さな座卓を置いて LaQ やパズルなどができるコーナーをつくっている。園庭での遊びのコーナーでは固定遊具や三輪車、竹ぼっくり、鬼ごっこなど体を動かして遊んでいる経験から、運動会でするリレーや挑戦迷路のコーナーもつくっていききたい。					

【幼児の遊びの様子記録】

(注：手書きの記録での幼児名は、本稿ではアルファベットで表記。)

日(曜)	出席数	遊びの様子	反省・連絡事項
20日 (月)	3歳児 (13名) 4歳児 (7名) 5歳児 (7名)	4・5歳が遠足に行っていたためか年長のAちゃんや他にも数名が眠たいと言っていたので、休息コーナーを広げて休んでいた。 年長のBくんが広告用紙を正方形にしてカメや車、人形などの折り紙を楽しんでいた。	休息コーナーを広げ皆で一斉に休息を促したが、喋ったりごそごそと動く子も多く、いつものように休息コーナーをつくり、自然な形で子どもに休息をとるようにした方が良く感じた。
21日 (火)	3歳児 (名) 4歳児 (名) 5歳児 (10名)	今日は5歳児が多かったが、Cくん、Dくん、Eちゃん、Fちゃん、Gちゃんは遊びがなかなか決められず、ウルトラマンの人形や武器になるおもちゃで遊び始め、落ち着かない様子だった。 短時間のHちゃん、Iちゃんは絵をかいたり、Jくんは磁石のおもちゃでじゅくじゅくと遊んでいた。	短時間の年少のKくんは真っ先に休息コーナーを選び、ごろごろしていた。そこで気持ちもゆったりとしてから、絵本コーナー、お絵かきコーナーといろいろな所に行って遊んでいた。 コーナーに仕切っていることで何の遊びをしているのかわかりやすく入りやすかったように思う。
22日 (水)	3歳児 (11名) 4歳児 (7名) 5歳児 (13名)	ごっこ遊びのコーナーでLちゃん、Mちゃんがウレタン積み木でお家を作り、ままたごとを出してお家ごっこを楽しんでいた。 そこへ何をして遊ぶか迷っていた年少児のNくんが加わっていたり、折り紙をしていたOくんや箱製作していたPくんも加わったりして遊ぶ姿が見られた。	今日は水曜日で時間が長かったので、一つのコーナー遊びから次々と別のコーナーに移り変わって遊ぶ姿が見られた。 ほとんどの子が全てのコーナーを経験していたように思う。
23日 (木)	3歳児 (20名) 4歳児 (6名) 5歳児 (14名)	製作コーナーでは折り紙や広告を使って折ったり切ったりして動くペンギンやイルカ、伸びる剣を作って遊ぶ5歳児の姿が見られた。 今日は絵本コーナーを真ん中につくってみる。休息コーナーからゆっくり出てきた子やそれぞれの遊びをしていた子が絵本を何人ものぞきに來ていたようだ。	年長さんが多かったせいか、一つのコーナーで集中して遊ぶ姿が見られた。
24日 (金)	3歳児 (14名) 4歳児 (6名) 5歳児 (7名)	昨日に引き続き製作コーナーで広告を使いながら折り紙をする年中のQくん、Rくんの姿が見られた。 ごっこ遊びや絵本コーナー、休息コーナーでもまんべんなく散らばり落ち着いて過ごしていた。	一つ一つのコーナーで落ち着いて遊ぶ姿が見られた。絵本コーナーでは一人でゆったりとした状況で見ることが出来ていたように思う。
25日 (土)	3歳児 (名) 4歳児 (名) 5歳児 (名)		
引次今 継週週 事への 項の反 省・	育預 担担 当り 者保	一つのコーナーで集中して遊ぶコーナーの姿が多く見られた。広告で折り紙をしたり遠足で見えたものを作ったりと、想像をふくらませて長時間集中していた。少し気分を変えるために絵本コーナーや休息コーナーにいて、一人でほっとしている姿も多く見られた。	
	担学 任級	5歳児の刺激から3歳児も制作することが楽しくなっている。(箱制作など) 学級の制作コーナーも充実させていきたい。	

図2 10月の月案及び10月20日～25日までの1週間の記録 (旧様式)

3.2 基本モデルから「富雄南モデル」への様式変更

富雄南幼では、試行的実践を通して浮かび上がってきた様々な課題への対応を検討しながら、様式や記載内容・方法についての改善を図っていった。旧様式の基本モデルを使った取組から新様式の「富雄南モデル」への実施プログラム修正作業を通して、預かり保育の質的改善にもつなげようという意識が醸成されていった。なお、基本モデルの月案に当たる様式は変更せず、記録欄を1週間単位で図式タイプの新様式に変更していった。その背景や理由として、記録の仕方について次のような点を改善課題として検討していったことによるものであった。それらの課題と対応について、新様式による実践記録(図3)をもとに具体的に述べていく。

- ① コーナーでの遊びについては、一人一人の様子が日ごとのスペースでは書ききれないこと、文字ばかりになってしまうことから、時差勤務による14時に勤務が終了する者との引継ぎでは、預かり保育担当同士あるいは預かり保育担当と学級担任との連絡において、短時間では保育状況をすぐにイメージできにくく十分に伝わらない。その対応として、コーナーの場所にメモ書きしていくようにした。図3ではLaQで遊ぶコーナーの場所に「2/10 ゆうき、あらた、うたは、こうへい、まさと、さくや」というように多くの幼児名が記入されている。また、連絡事項のほし組欄に「ゆうきLaQで水陸両用の乗り物をつくった後、翼を足して空にもとべるようにしたり燃料タンクをつくったりする。」と、工夫して遊んでいた様子が書かれている。この記入方法により、学級担任は学級でも本児のよさを認めて他児にも知らせるきっかけになったと肯定的に受け止めている。
- ② 基本的な遊びのコーナーは、月の計画に示されているが、遊びの様子の記録が別になっていて、幼児の興味・関心によって遊びの場や必要な遊具・材料がどのように変わったかが一目でわかりにくい。その対応として、変化が一目でわかるようにコーナーを囲む形に違いをもたせた。図3では計画に基づく基本となるコーナーは□で示し、またその日興味をもって新たに生まれた遊びについては、○で囲んで場所と遊びの内容、幼児名を示すこととした。このことにより幼児の遊びに対する興味や関心の移り変わりがわかりやすくなり、学級担任も次の環境構成のヒントになると評価している。
- ③ 預かり保育担当が話し合って記録しているため、預かり保育終了後の記入時間の確保が必要になる。時には時間的に無理な日もあり、毎日保育終了後に書くことが負担になることもある。その対応として、その日の記録についてはメモ程度を基本とし、詳しく尋ねたり説明したりする必要があることがらについては口頭で補足説明していくという共通理解を図った上で、記録を読み合うこととした。また、欄外もその日の特記事項のメモ欄として活用されている。例えば図3では「2/13 雪が降ってくる。廊下で段々積もっていく様子を楽しんで見ていた。りおん、まさのり、まさと、あやね、あきひと、ゆうき」と、幼児名が記録されていた。学級担任も翌朝、短時間で記録に目を通すだけでも、幼児へ話しかけるきっかけになったと述べている。
- ④ 遊びの場のコーナー図と遊びの記録の1週間分が、1枚の用紙に収まればより見やすくなるのではないかという提案が出された。その対応として、図3の積み木コーナーでは2/10の記録として「ペットショップどこにしようか?」「休息コーナーを指さし、ひのわとまりかはねこになる」と、ひのわ、まい、りおんの幼児名とともに記入されている。色別マーカーペンによって違う学級の幼

児と関わって遊んでいることや、○で囲むことによって遊びのグループができていたことが一目でわかる。また、2/12の積み木コーナーでは、ひのわ、まい、まりか、こうたろうの4人が家づくりを楽しみ、「まい、ウレタン積み木の上に木のおもちゃでおやつをつくり、ひのわとまりか（ねこ）の帰りをまっている。まりかを呼びにいく。こうたろう、玄関をつくると言ってつくりだす。」と記録されている。このグループの中でひのわとまりかが↔で示されている。これは、預かり保育担当がこの日の互いのやりとりと関わりに注目していたことがわかるように記録の仕方を工夫したものである。

富雄南幼では、預かり保育において特に重要と考えているのが幼児一人一人の情緒の安定と異年齢との関わりの中での育ちである。旧様式の基本モデルでは幼児の様子について断片的にしか記録できなかった反省を踏まえ、園が預かり保育において何を重要と考えているか（何に注目し、何を目指して保育を行っているか）、また、幼児理解と幼児相互の人間関係構築のために連携が必要となる学級担任は何を知りたいと考えているのか、また何を伝えたいと考えているのかについて、全員で再度確認し合い、記録の焦点化と図式化を図っていったことが「富雄南モデル」から読み取れる。

「富雄南モデル」としての実施プログラムは、平成27年2月9日からの1週間の記録である。なお、記録に出てくる幼児については、各学級担任に一目でわかってもらえるように名前の下に色を違えてマーカーペンで表す工夫をしているが、本稿では内容の読み取りやすさと印刷上の都合を考慮して、記入者の了解を得た上でアンダーラインの線種を変えて原文どおりに転記し、幼児名については、個人情報保護の観点から特定されないよう仮名に変更している。

次の写真は、預かり保育でのコーナーの配置と幼児たちの遊びの様子である。（図4）



図4 預かり保育の様子 [富雄南幼撮影：平成26年10月～平成27年3月]

平成27年2月9日(月) ~ 2月13日(金)

遊びの様子

<絵本コーナー>

「ホーローハートの心」を2人で読む
 (もう1人は) 絵本を長い時間読む
 「明日、ぼくの部屋に絵本がある」(ママが読む)
 「お母さん、自分達を育ててくれたお母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」
 「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」

<休息コーナー>

「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」
 「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」

<積木コーナー>

「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」
 「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」

<制作コーナー>

「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」
 「お母さん、お父さん、お母さん」
 「お父さん、お母さん、お父さん」

廊下

入口

入口

連絡事項	
みかん組	
いちご組	お母さん、お父さん、お母さん
さくら組	お母さん、お父さん、お母さん
ひまわり組	お母さん、お父さん、お母さん
にじ組	お母さん、お父さん、お母さん
ほし組	お母さん、お父さん、お母さん
反省・次週の保育について	お母さん、お父さん、お母さん

図3 実施プログラム (新様式)

4. 実施プログラムを活用した預かり保育実践の考察

4.1 実施プログラムは、預かり保育の可視化に有効であったか。

当園では年々預かり保育へのニーズが高まり、利用児の多い時は、それぞれの遊びが入り混じって落ち着かない空間になるという状況が発生し、担当者が一人一人の幼児の姿を把握できにくかったり、不定期に時々利用する幼児にとっては、どの場所で遊べばよいのか不安になって友達と十分に関われなかったりしたなどの課題がみられた。そのような状況を解決するための一方策として、コーナー保育の手法の導入に取り組んだ。そして、図2に示した基本モデルによる実施プログラム作成を通して、計画性の面からはねらいや教師の幼児に対する願いが共有できた。

しかし、実際に活用していく中で、基本モデルを用いた1日の記録の内容や書き方に無理がみられ、再検討した結果、記録面ではコーナー配置図を取り入れた新様式に変更し使っていくことにした。教師が幼児の興味・関心の方向や異年齢との関わりもコーナー配置を中心とした図式化によって把握できやすくなり、預かり保育の可視化の観点からも幼児個々の育ちを把握する上で有効であることがわかった。また、コーナー保育の手法を導入したことについては、成果面として次の(1)～(4)が挙げられる。

- (1) 幼児自身が、友達がどのコーナーでどのような遊びをしているのかがわかりやすく、コーナーの選択でもあまり迷うことなく選択して遊びに入りやすくなった。
- (2) コーナー設置により遊び空間として確保されていることで、幼児一人一人が安定して遊ぶことができた。また、休息コーナーで何もしていないように見える幼児も、その子にとって意味のある場所や時間であることがわかりやすくなった。
- (3) 預かり保育担当はもちろん、保育サポートとして関わる学級担任にもコーナーで遊ぶ幼児の関心などの状況が把握しやすくなった。
- (4) 降園の際には保護者に対して、新様式のコーナー配置図に記録したメモを手がかりに幼児の様子を具体的かつ印象的に伝えることができるようになり、保護者に安心感をもってもらえるとともに信頼関係の構築にもつながっていった。また、コーナーで遊ぶ幼児の様子や幼稚園としての預かり保育についての考えなどを家庭に帰ってからゆっくり読んでもらえるよう、毎月「おひさまだより」⁵⁾を発行している。(付図2)

4.2 実施プログラムは、コーナー保育の手法を生かすための様式になっていたか。

幼児の記録については1週間で1枚の用紙に書き込むことを基本としてきたが、週の途中でコーナーの配置が大きく変わることもあった。そのため、記録の期間と用紙の枚数については柔軟に対応し記録することに変更した。変更理由の主なものは、学級での経験から幼児が新たな遊びの場を求めて、それまでの遊びのコーナーにあまり魅力を感じなくなってきたこと、異年齢児からの刺激を受けて興味をもつ子が増えたことによってコーナーのスペースを拡大してほしいといった願いが出てきたことなどであった。

一方、幼児がどのような遊びに興味をもち、どのような言葉を発して友達と関わっているか等については、コーナー配置を中心とした図式化へと様式を変更したことにより、保育の中でも気付いたことを簡単にメモしていけるなど、旧様式の基本モデルよりも記入しやすく見やすくなった。

4.3 実施プログラムは、預かり保育の記録性を高めるとともに引継機能と評価機能を果たせたか。

限られた時間の中で預かり保育担当同士や学級担任との情報交換による意識の共有化を図っていくためには、記録によって何を知らたいのかを明確にする必要がある。「富雄南モデル」としての新様式に変更してからは、学級担任からは「何をして遊んでいるのか、どんな言葉を交わしているのかなど、その場の情景がわかりやすい。」「クラスでは見られない異年齢との関わりが一目で見て取れることができる。」「預かり保育の経験が学級での活動にも生かせるように、特にコーナー設置の方法と記録の取り方を参考にしたい。」等の意見が出された。

また、預かり保育担当からは、「保育の合間に気付いたことをすぐにコーナーの図にメモとして記録できるので負担軽減につながっている。」「担当者としてその日の幼児の姿の振り返りができやすくなった。」「学級担任との連携も記録を通して具体的な情報を交換し合えるようになった。」など、図式化された保育記録については引継機能と評価機能の有効性に対する肯定的な意見が出された。

学級担任から預かり保育担当への連絡については、これまでからタイミングを見計らって口頭で行ったり付箋をボードに貼ったりして伝えることが多かった。実施プログラムの連絡事項欄の活用では、学級担任から特にその日の幼児の様子について気になる子への対応について必要事項を記入することにした。その結果、どの預かり保育担当が読んでも幼児への個別対応ができやすくなるなど、互いに意識して取り組んだ試行実践としては新たに連絡手段が増えたことになり、一定の効果がみられた。しかし、連絡事項欄は、日々の記録として残す必要のある幼児や確実に伝達すべきことがらに限定しておくべきであることもわかってきた。なぜなら、試行に取り組み始めた当初は記入に対する負担感の方が、記録に残す有用性よりも大きかったからである。

「今週の反省・次週への引継事項」の欄には、預かり保育担当が今週1週間を通して幼児の姿や援助の実際、コーナーの設置と遊びの種類からみた適合性等について、保育の振り返りとして記述されていた。また同欄には次週に向けてのコーナー変更の必要性や意図なども記入されていた。一方、各学級担任は預かり保育担当が記入した内容を参考にして、次週に計画していた教育課程に係る教育活動の変更などの弾力的な運用に役立て、保育の連続性と関連性を考慮することができた。

平成26年度末に園としての教育実践を収録した『研究のまとめ』⁶⁾の中に、次のような預かり保育の評価に関する記述がみられるので、その関係部分を引用する。

- ・3歳児は、保育室が変わることで泣き出すことも多かったが、担当者間で連携を図り、一人一人がゆったりとかかわれるようにしてきたことで、安定して過ごせるようになっていった。また、遊びのコーナーに年長者に誘ってもらうことで、真似たり場の共有を楽しんだりする姿が見られた。5歳児は、年少者が困っていると進んで保育者に知らせに来たり、自分たちで手助けしたりして年長者としての自覚や自信が感じられた。
- ・2学期から、遊びのコーナーを分け、環境を整えた。コーナーで分けるだけでなく必要に応じてパーティションなどで仕切ることで、子どもたちも保育者もそこで何をするのかがわかりやすくなり、子どもたちがスムーズに遊びに入ることができるようになった。
- ・コーナーに休息できる場所を作ることによって、より家庭的な空間となった。
- ・連絡用のホワイトボードや預かり保育として発行している「おひさまだより」、長時間保育懇談会で子どもたちの遊びの様子を写真掲示しながら知らせたことで、保護者は遊びや生活の様子がよくわかり、預かり保育への理解が深まった。

5. まとめ

筆者らが研究を進めるに当たって目標としたことの一つは、「コーナー保育の手法を取り入れることによって、幼稚園の特性を生かした預かり保育が展開できること」であった。目標に近づく方途としては、預かり保育の記録を通して、幼児の成長・発達を教育の観点から適切に同僚や保護者に伝えられ共有できること、預かり保育担当だけでなく幼稚園全体として記録の蓄積を行うこと、計画の振り返りや指導の継続性をより確かなものにしていくことであると考えた。

本稿ではその一つのアプローチとして実施プログラムの作成及び活用を試みてきたが、①幼稚園としての特性を生かした預かり保育の全体像を具体的に明示していくこと、②コーナー保育の手法を生かした預かり保育がより確かな保育方法・保育形態となり得ることの検証については、今後も継続して実践事例を蓄積していくことが必要であると痛感している。本研究では特に実施プログラムの作成と試行を中心に、富雄南幼の一園だけの検証にとどまった。今後も関心をもってもらえる幼稚園においてコーナー保育の手法を取り入れた預かり保育に取り組んでもらい、「富雄南モデル」に更なる検討が加えられた新たな実施プログラムが提案されることを願っている。

6. 謝 辞

本研究に当たっては、平成26年度に預かり保育実施プログラムの作成及び繰り返しの検証・修正作業に精力的に取り組んでいただいた奈良市立認定こども園富雄南幼稚園の仁井聡美氏、水野優子氏はじめ諸先生方、また本稿への掲載許可をいただいた奈良市立富雄南こども園園長大西育代氏に厚く御礼申し上げます。また名鉄学園豊田花園幼稚園には、コーナー保育実践や預かり保育実践に関する貴重な資料提供と掲載許可をいただきましたことに対しまして心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説：210. フレーベル館.
- 2) 民秋言 (2010) 幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷：27-28. 萌文書林.
- 3) 名鉄学園豊田花園幼稚園 (2013) 月案資料.
- 4) 奈良市立認定こども園富雄南幼稚園 (2014) 長時間保育指導計画 (10月).
- 5) 奈良市立認定こども園富雄南幼稚園 (2014) おひさまだより (10月号).
- 6) 奈良市立認定こども園富雄南幼稚園 (2014) 研究のまとめ.

参考文献

- ・恒岡宗司 (2013) 預かり保育の在り方についての一考察 (2) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第44号.
- ・恒岡宗司 (2014) 預かり保育の在り方についての一考察 (3) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第45号.

10月 指導計画〈長時間保育〉

奈良市立認定こども園富雄南幼稚園

子どもの姿			ね ら い		内 容		◇環境の構成・◇援助		遊 び		家庭・教職員との連携
教 育		養 護									
三 歳 児	○生活の流れに沿って進んで着替えや星寝の準備、持ち物の始末など身の回りのことを自分でしようとするようになってきた。	○保育者や異年齢の友だちと一緒に、好きな遊びを楽しむ。	○季節の変わり目での、一人一人の健康状態に留意し、午睡や休憩をとるようにする。	○生活の中で、自分でできそうなことを見つけてしてみようとする。	○保育者や友だちと一緒に遊んだり、異年齢の友だちを真似たりして遊ぶ。	○身の回りのことなど、一人一人に合わせて対応し、自分でできた時は褒め、自分でしてみようという気持ちをもてるように励ます。	○室内遊び ・ツイスター ・ジェンガ ・りかちゃん人形 ・ブラレール ・トランプやオセロ ・粘土 ・ままごと ・ミニカー ・パズル ・折り紙、塗り絵 ・かいたりつくったりする	○幼児の姿や興味・関心などを職員間で情報交換しながら、クラス担任と連絡をとり合ったことを、預かり保育にも活かせるようにする。	○午前保育の活動や運動量によって、疲れ方などに個人差があるので、家庭でも休息をとることを配慮してもらう。	○朝夕と日中では、気温差があるので自分で衣服の調節ができるように家庭でも衣服の点検をしてもらう。	
	○年上の友だちが掃除をする様子を見て、ほうきやちりとらなどを使って掃除をしている。上手く砂を集められるようになってきた。	○身の回りのことを自分でしようとする。	○秋の自然物を見たり触れたりする。	○したいことや思っていることを友だちや保育者に話し、安心して過ごせるようにする。	○困ったことやしてほしいことを言葉や態度で伝えようとする。	○落ち葉や木の実を探したり、触れたりして遊ぶ。	○自分のしたい遊びを十分に楽しめるようにするとともに、保育者も一緒に遊びながら、仲立ちしながら場を構成したり幼児同士がかかわれるようなきっかけをつくったりする。	○散歩（田んぼ） ・秋の草花 ・稲刈りや稲刈り後の様子 など			
四 歳 児	○したいこと、思っていたことを言葉で伝えられるようになってきている。	○異年齢の友だちに親しみや憧れの気持ちをもつてかわらうとする。	○手洗い、うがいを進んでいる。	○手洗い、うがいなどを一緒にしたりすることで、健康に過ごすための生活習慣が、身に付けられるようにする。	○秋の自然に興味や関心をもつ。	○準備や片付け、掃除などに必要な用具を準備したり仕方を伝えたりする。また、友だちや保育者と一緒に掃除や片付けをする中で取り組んでいる一人一人の姿を認め、意欲をもてるようにする。	○戸外遊び ・かけっこ ・鬼ごっこ ・砂場 ・固定遊具 ・ブランコ うんてい 鉄棒 ジャングリズム 滑り台 チェーンネット のぼり棒 など ・落ち葉や木の実を使った遊び など	○幼児の思いを十分に受け止め、共感する。また、トラブルが起こったときは保育者が代弁したり言葉をつないだりしながら、相手の考えや気持ちに気付けるようにする。	○朝夕と日中では、気温差があるので自分で衣服の調節ができるように家庭でも衣服の点検をしてもらう。	○朝夕と日中では、気温差があるので自分で衣服の調節ができるように家庭でも衣服の点検をしてもらう。	
	○秋の自然に興味や関心をもつ。	○自分の思いや考えを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。	○自分の思いや考えを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。
五 歳 児	○友だちと遊ぶ中で意見や考えが合わなくて言い合ったり、一方的に責めてしまったりするが、仲立ちする事で話し合いができるようになってきている。	○自分の思いや考えを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。	○自分の思いや考えを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	
	○友達と誘い合って、好きな遊びを楽しむ中で、役割を決めたり、工夫したりしながら遊びを進めていく姿が多く見られるようになってきた。	○年下の友だちへの親しみが増し、優しく声をかけたり、困っていることに関心したり一緒にしたりして自然にかかわる姿が見られるようになってきた。	○自分の思いや考えを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。	○自分の思いや考えを言葉で伝えたり、保育者や友だちの話を聞いたりする。

付図1 富雄南幼の指導計画（10月）



おひさまだより

平成26年10月15日

10月号

奈良市立認定こども園富雄南幼稚園

日増しに秋が深まり朝夕は肌寒く感じますが、昼間はよく晴れて秋風の気持ちの良い季節になりました。

おひさまランドの子ども達は元気に園庭を駆け回り、「先生バッタみつけた！見て、おんぶしてるで。」「これ知ってる！ネコジャラシやで。」「この種なんだった？」等と虫や植物に関心を持ち、見たり触れたりして遊ぶ様子が見られます。砂場では赤や黄色に色づいた落ち葉をご飯作りの具材にして「はい、お肉とごはんです。」と葉っぱを集めて遊んでいます。

また固定遊具に挑戦する年長、年中児の姿を見て、「やってみる！」「私一つやったらできる。」とうんていや縄のぼりに挑戦する年少児の姿も見られます。

2学期になって、子ども達はだんだんと遅くなり、努力してやり遂げようとする気持ちが出てきているようですね。

寒暖の差が大きい季節です。体調管理には十分に気を付け、手洗いうがいをしっかりとしていきたいと思います。



<育てたいこと>

- ・異年齢児が親しみをもってかわり、一緒に遊ぶことを楽しむ。
- ・手伝いや片づけ、掃除を進んでしようとする。
- ・身近な秋の自然に触れて、親しむ。

<気を付けたいこと>

- ・気温や活動量に応じて衣服の調節をし、健康に過ごせるようにする。

<こんな遊びをします>

- ・戸外で遊ぶ。
(固定遊具・三輪車・スクーター・砂遊び・かけっこ・虫探し・落ち葉や木の実を拾ったり使ったりして遊ぶなど)
- ・室内で遊ぶ
(かいたりつくったりする・ぬりえ・折り紙・ビーズ・ままごと・粘土・ツイスター・ミニカー・プラレール・リカちゃん人形・トランプ・LaQなど)

付図2 富雄南幼の預かり保育だより

☆遊びの様子を紹介します☆

制作コーナー



「ネックレスつくる！」「私も！」「と、ビーズで身につける飾りものをつくることを楽しんでいます。「次は赤にする」と、ビーズの色を選びながら根気強く紐に通していました。出来上がった飾りものは「お母さんにプレゼントする」と持ち帰りました。

絵本コーナー

リズム室や園長室から好きな絵本を借りてきて読んでいます。「この本面白いよ」と友達同士で知らせ、絵本への興味が高まっています。



休息コーナー



個々の体調に合わせて休憩できるスペースを設けました。遊びの合間に「ちょっと休憩するね」と、タオルに包まり心も体もリラックスしていました。

園庭でも元気いっぱい！



戸外で元気に遊ぶ子ども達は縄のぼりに挑戦したり、タイヤや丸太を並べて双方から渡り、ぶつかったところで「じゃんけんぽん」と友達と一緒に遊び方を考えたりしています。ルールを守って遊ぶ楽しさも味わっています。



食欲の秋！親子でおやつ作りはいかがですか。ジャガイモは今からがおいしい時季を迎えます。ジャガイモを使ったおやつを紹介します！

チーズ入り芋団子

材料	分量（大人2人）	作り方
ジャガイモ	3個	① ジャガイモは水から茹で、柔らかくなったらザルにあげ、ペーパータオルにくるみながら皮をむく。
片栗粉	1/4カップ	② ボウルに入れ、熱いうちに片栗粉、塩を混ぜ合わせ、さらに小麦粉を加えよくこねる。
塩	少々	③ ②を食べやすい大きさの団子状に丸め、真ん中に小さく切ったチーズを入れ、軽く押し小判型にする。
小麦粉	大さじ2	④ フライパンにバターをとかし、③を入れ両面をこんがり焼く。
チーズ	2個（6Pチーズ）	⑤ 醤油、砂糖、みりんを混ぜ合わせたものを④に加え、芋団子にからめる。
バター	適量	☆できあがり☆
醤油	小さじ2	
みりん	小さじ2	
砂糖	小さじ1	

